



お母さんのまなざしと

ケンの目

吉川はる奈

プロローグ

ケンに出逢って、私は「子どもの育ち」とは本当に何て深く大きな意味をもつのだろうと感じずにはいらなかった。ケンは「言葉が出ない」という大きな壁をもちながら多くの人との関係を着

実に広げていった。それはケンが価値ある人間として認められた環境があまりにも自然に作られてきた過程ともいえるかもしれない。

出逢い

妊娠後期の大きなお腹をしたお母さんがケンを



保健所の心理相談に連れてきた。連れてきたというより慌てて追いかけてきたという方が適切かもしれない。ケンは何じめての部屋で落ち着かず部屋中をぐるぐる駆け回る。初めての場所はどんな子どもであっても不安で落ち着かないのは当然のことなのだがケンは奇声を発し、あちこち走り回り、目も合わない。ケンは二歳半を過ぎていた。

「お母さんからの発達相談の訴えで来所した」と始めに保健婦さんから聞いていた。こんなに大きなお腹をしたお母さんはケンと毎日どうやって過ごしているのだろうかと思うと心が痛んだ。「毎日大変でしょう」というとお母さんは首を大きく縦に振りうなずいた。心なしかお母さんの目がうるんでいるように見えた。だがすぐにお母さんのまなざしは本当にまっすぐと私に向けられた。次に発せられることは何だろうかと私は待った。

お母さんは「出産で実家の奈良へ戻る日が近づ

いている、ケンの動きが心配だから知り合いに頼んで検査してもらおうかと思っている」という。

相談の場で、初めて出会って心配だから病院を紹介するなんてことはまずない。だがお母さんのまなざしはまっすぐ私に向けられ迷いは見られなかった。というより迷いが見られないのではなく、突破口を捜していたのかもしれない。これまでのケンの家での様子、家族のこと、お母さんの思い、お父さんの考え、友人に相談したことなど様々なお話をお母さんから聞きながらまた始終動き回るケンの様子をみながら考えた。お母さんは検査を受ける



ことを突破口にして先を見つめていた。私はことばを選びながらゆっくりと言った。「検査を受けることよりもケンが自分の力を十分に発揮できる場を作っていくことが大切であること、そしてそれはお母さんひとり、家族だけでは大変で、周囲の力をかりていこう、だから検査を受けるのなら今後を考えて地域と関連のある病院の方がいい」と保健所に関わる先生の所属病院を紹介した。同時に地域の幼児教室を紹介して見学してみるよう勧めた。地区の保健婦さんにも同行してもらった。ケンは気に入ったようでお母さんは「水を得た魚のようだ」と語った。出産ぎりぎりまで通った。しかし出産後しばらくお休みになるのだろうかなど思っていた。

弟エィ誕生

エィが誕生しても幼児教室へ通うペースは変わ

らなかった。私自身は出産後はケンがしばらく幼児教室を休むのは仕方がないと思っていた。多くの親子がそうであるように家族のライフサイクルの変化が原因でしばらく子どもの生活が変化することは避けられないからだ。しかしケンとお母さんの教室へ通うペースは変わらなかった。もちろんお母さん一人で乳飲み子を抱えて通うのは無理だ。同じ団地に住むお母さん方に助けられながら通い続けた。相談の日も欠かさずやってきた。「エィはどうしたの？」とたずねると「ちょうど昼寝の時間だから、三時間は眠るし、隣の奥さんに泣き声が聞こえたら見て下さい、と頼んできた」という。まっすぐ見つめるお母さんの目があつた。私は「エィも大変ね」と笑った。

まっすぐ、本当にまっすぐ向けられるお母さんのまなざしには他者を信頼し、自分の気持ちをありのままに表現する誠実さと確かさと強さがあ

る。私を含め周囲の者はできる限りお母さんとケンとともにありたいとごく自然に思う。「エイを見ているとますますケンがいとおしくなる。エイがこんな簡単に、さも当たり前のように一つ一つ教えなくても自分の力で吸収し自分のものにしていく。ケンは何年も何年もかけてやっと吸収するのに」とお母さんは語った。

保育園へ

エイをつれて幼児教室へ通った次の年、ケンは保育園へ入園した。その保育園でリュウと一緒にクラスになる。リュウのお母さんは転居してきたばかりで知り合いもない。おまけにリュウの子育てにお手上げ状態で保健所の心理相談にやってきた。パソコン通信が大好きなお母さんだ。リュウのお母さんの話の中にケンのお母さんの話が出てくるようになった。頼りにしているらしい。ケ

ンのお母さんもリュウのお母さんは考えが違っておもしろいという。リュウのお母さんに頼りにされているケンのお母さんの姿。一年前の幼児教室に通う頃のお母さんとは異なる姿だった。ケンとリュウのお母さんの話を聞いて、相談室以外のリュウとケンの姿をみたいと私は保育園を訪ねていった。担任の先生だけでなく全ての先生に声をかけられ丸ごと受け止めてもらっている愛されている二人の姿があった。先生方の話の中に二人のお母さんの話も自然に語られた。

カナは同じクラスの女の子。「カナのお母さんからお礼を言われた」とケンのお母さんが顔を輝かせてある日話してくれた。「カナのお母さんから「ケンちゃんに優しくしているカナを見てびっくりした。それまで母親の私はカナはひとりっ子でわがままで優しきなんてない子かと思っていた。ところがケンにお世話をしているカナを見

た。本当に感激した。ケンがいたからカナの良さがわかったの。ありがとう」と。カナそしてカナのお母さんにケンがケンという存在が認められてケンのお母さんはうれしかったのだろう。

「ケンがいなければ、私はこんなに真剣に一生懸命生きてこなかったと思う。それまで私なんかいつ死んでもいいと思って人生を投げしてきたから」とお母さんは語った。さらに続けた。「ケンによって多くの人との出逢いがあった」と。

カナはケンに出逢いケンにやさしく接することを知った。カナの母はケンの存在によりカナのやさしさを初めて知った。ケンは様々な人に価値ある人間として認められその存在を大きくしていた。

教育委員会との関係

就学を次の年にひかえお母さんは教育委員会の

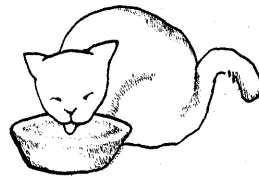
担当者から就学相談を受けた。思いもよらぬケンに対する評価の回答。このときばかりは

「初めてコミュニケーションできない」とお母さんは落ち込み電話してきた。「保育園の

中でのケンの姿を見てほしい。認められ支えられている場で見せるケンの姿を見て欲しい」。母の願いが叶い教育委員会の人が保育園へ見に来た。異例のことだった。帰り際教育委員会の担当者が「勉強になりました。経験で獲得する力がこの子には随分有るのですね」と語った。

卒園を間近に

ケンは「言葉で表現する」という点では大きな



壁を持っている。しかしケンが保育の場で発揮する力は想像を超えて大きい。着実な成長を感じさせる。

親子が新たな場で一つ一つ、保健所で幼児教室で団地内で保育園で教育委員会で、彼らを支える関係を作り上げていく過程を見つめてきたからだと思う。母と周囲の人々、ケンと周囲の人々、母とケン、親子と周囲の関係の広がり。その親子の存在が周囲の人たちを一生懸命にさせる。周囲の人たちは一生懸命になることで何かに気づく。そこにはケンの確かな存在がある。単にケンがケンの母が他者から何かを与えられるという一方向的な関係ではなくケンの存在もまたカナにカナの母にリュウに保育者に確かな力を与えている。ケンが価値ある人間として認められた環境があまりにも自然に作られていく。

もちろん親子にとっては大変なすったもんだが

あったという。しかしそれを乗り越えてきたお母さんの目もケンの目もあまりに涼しく穏やかだ。

ケンの目

最後に。小学生で夏休みを過ごすケンにあった。部屋に入ってくるケンの目は不安げだった。「いつも学校へ通う道と違うから不安だった。こんなふうに不安を見せるようになったのだ」とお母さん。帰る頃にはケンの目の中に大きなたくましさが見えた。おおはしゃぎだった。次に出逢うときまた違う色のたくましさに出逢えることを今から私は楽しみにしている。

(お茶の水女子大学)